

一般社団法人日本機械学会 第 22 回標準事業表彰 選考結果

貢 献 賞			
	受賞候補者名	業績名	推薦理由
1	齋藤 利之	発電用設備規格 維持規格の策定及び規格の品質向上にかかわる貢献	齋藤氏は原子力発電所の再稼動と長期運転に貢献する重要な規格である発電用設備規格 維持規格に関連する分科会及び作業会に主導的な立場で参加し、日本機械学会での規格化活動に大きく貢献している。特に維持規格作業会では、応力腐食割れ（SCC）の亀裂進展速度線図、ピーニングを用いた予防保全、BWR のオーステナイト系ステンレス鋼管の SCC に対する個別検査評価に関する事例規格の策定等に大きく貢献した。また、維持規格分科会では副主査として、規格年版の原稿のとりまとめ役となり、候補者の指導により維持規格の品質が一段と向上した。維持規格分科会副主査として、用語統一検討タスクに参加し、維持規格が一早く推奨表記に対応したことは、齋藤氏の計画・指導によるところが大きい。上記の理由から貢献賞に推薦する。
2	花橋 実	滑り軸受の規格作成活動及び国際標準化活動への貢献	花橋氏は、滑り軸受に関する工業標準の普及のため、2003 年以降延べ 15 年間にわたり、日本機械学会 ISO/TC123 国内委員会委員として活動している。主要な活動実績としては、ISO/TC 123/SC 8 委員会マネジャー 2.5 年(現任)、国内委員会幹事 5 年、ISO 規格新規開発 PL を 2 件、ISO 規格改訂 PL を 4 件、ISO 規格原案作成委員 1 件、JIS 制定委員 9 件、JIS 改訂原案作成委員会幹事 4 件など、国内外の規格原案作成や改定作業に多数従事している。また、日本への協力を求めるためのアジア各国での教育活動や、滑り軸受標準化活動の推進に資する日本トライボロジー学会での講演など、基準の策定や改定以外での、普及・教育活動にも尽力している。 上記の理由から貢献賞に推薦する。
国 際 功 績 賞			
	受賞候補者名	業績名	推薦理由
1	東井 隆行	二酸化炭素回収・貯留（CCS）における回収技術の国際標準化	2050 年カーボンニュートラルの実現に向けて、二酸化炭素（CO2）排出量を大幅に削減できる二酸化炭素回収・貯留（CCS）技術が重要となっている。日本機械学会では、短中期的技術として学会誌に CCS の特集が組まれ、技術ロードマップにおいても注目技術として取り上げている。また、CCS 技術の標準化のために、国際標準化機構（ISO）において TC265 委員会が 2012 年に設立された。CCS の構成技術のうち、我が国の企業は、CO2 の回収技術に関して強みが有しており、TC265 委員会で重要な位置を占めている。東井氏は、回収作業部会（TC265/WG1 部会）の初代コンビーナ（主査に相当）として同部会の良好な相互理解のための環境醸成を図

			り、火力発電所での CO2 回収技術に関する国際標準化の実現をはじめ、各種回収分野に係る国際規格取り纏め（国際規格 2 報、技術報告書 2 報を出版）に主導的立場で取り組んできた（任期 3 年、5 期目）。CCS における CO2 回収技術の国際規格標準化とその発行を主導したことのみならず、我が国の同分野における国際的地位向上への貢献は大きい。 上記の理由から国際功績賞に推薦する。
2	平野 明彦	原子力プラントにおける合理的で新しい疲労評価体系の国内外規格構築への貢献	平野氏は 1994 年から環境疲労の研究に従事し、その研究成果を ASME 関連の国際会議や雑誌に数多く発表・投稿してきた。特に、米国規制当局 USNRC の環境疲労の技術根拠書 NUREG/CR-6909 に同氏が貢献した多くの試験・評価結果が取り込まれた。さらに、2012 年から ASME の Code Committee に参加し、2024 年に Project Manager として「環境疲労評価の重要因子であるひずみ速度算出法を規定する Code Case の発行」の承認を手がけ、ASME の環境疲労評価手法の体系化にも大きく貢献したことは、JSME として極めて誇れる国際業績である。 また、JSME 疲労評価分科会副主査として合理的な設計疲労曲線の策定に主導的な役割を果たし、ASME 規格への取り込み活動に携わると共に、熱疲労評価指針の JSME 及び ASME における規格化にも取り組んできた。 上記の理由から国際功績賞に推薦する。
コードエンジニア賞			
	受賞候補者名	業績名	推薦理由
1	桑水流 理	発電用原子力設備規格の技術的妥当性確認を通じた規格品質向上	桑水流氏は、実験及び計算科学的アプローチを連携させた、応力腐食割れ、疲労等の劣化事象の発生・進展メカニズムに関する研究に取り組み、多数の査読付き論文が公開されているとともに、複数の学協会委員会で主査や幹事等として活躍している。 2008 年には、維持規格分科会に参加し、自身の劣化事象、観察技術、並びに評価技術に関する深い知見に基づき、規格原案をレビューし、技術的妥当性の確保及び向上に多大に貢献している。原子力学会及び電気協会と合同で実施した維持規格を対象とした規格策定活動ピアレビューでは、オブザーバに選任され、レビュー実施に貢献した。 2024 年からは維持規格分科会の上位組織である原子力専門委員会に参加するとともに、核融合専門委員会委員及び分科会主査も務め更なる貢献が期待される。 上記の理由からコードエンジニア賞に推薦する。